論文要旨

総合的な学習の時間の展開における課題と解決についての考察
－小学校教師を対象とした意識調査を手がかりに－

14SK1005　村井 万寿夫

1　研究の背景と目的

先行研究によると，総合的な学習の指導に苦手意識を持っている教師が一定の割合でいることが明らかになっている。秋場（2014）は「総合的な学習の時間における教師の意識に関する考察」の中で 71 人の小学校教師を対象とした調査の結果，苦手意識を持っている教師が半数以上いることを報告している。教師の意識については，中央教育審議会の答申（2003）においても教師の負担感や悩みなどを考慮する必要があることについて指摘されている。しかし，教師の苦手意識をどのように変えていくのか，教師の負担感をどのように減らしていくのか，具体的な方策を理論的に明らかにした上でモデルを用いて授業改善を提案する論文は見受けられない。また，学習指導案を立てる教師にとって有用な要点や見取図を示した論文も見受けられない。

このようなことから，本論文においては，金沢市の小学校教師を対象とした意識調査を手がかりに，総合的な学習の展開における課題を把握し，解決に向けた方策について考察することを目的とする。

2　研究の方法

（1）総合的な学習の研究動向の把握

過去 10 年間の『日本生活科・総合的学習教育学会』の学会誌に掲載された論文をレビューして研究動向を把握することによって，本論文において研究すべき指針を得る。

（2）質問紙による意識調査（第１次調査）

金沢市の小学校教師を対象に質問紙調査を行い，総合的な学習が得意か，取り組みの意識はどうか，指導することは好きかなど，総合的な学習についての意識を明らかにするとともに，総合的な学習の展開を阻害していると思われる要因について検討する。

（3）聞き取りによる意識調査（第２次調査）

質問紙調査に続いて聞き取り調査を行うことによって，総合的な学習の指導にあたる教師の意識について考察を深め，総合的な学習の展開上の留意点についての示唆を導出する。

（4）今後の展望：解決方法の提案

質問紙調査の結果を分析する過程で教師たちの意識を『肯定的な群』と『否定的な群』

に分けて考察し，『否定的な群』における問題点の解決方法について提案し，総合的な学習の指導についての今後を展望する。

（5）授業改善のためのモデルと見取図の考案

教師の意識を反映させた授業改善のためのモデルとして，『児童側から見た素材の見方と教師側から見た授業の核となるねらいを連関させるモデル』（素材とねらいの連関モデル）を考案する。次に，このモデルをもとに具体的にどのように授業計画を立てていくかについて提案するための『総合的な学習の計画・実施・評価のための見取図』を考案する。

3　研究の結果と成果

質問紙調査をもとに総合的な学習の展開を阻害する要因について検討するため，教師の意識や力量などについて考察した結果，以下５点が明らかになった。

① 若手の教師ほど総合的な学習を得意としていない傾向があるが，指導が好きだと意識している教師は多い。

② 総合的な学習の学習指導を得意だと意識している教師は多くないが，指導が好きだと意識している教師は多い。

③ 総合的な学習が全く好きでないと答えた教師は，一人の教師で総合的な学習を展開することに限界を感じている。

④ 総合的な学習に必要だと考えらえる力量の中で，身に付いていないと意識している教師の割合の多いのは「環境設定力」である。

⑤ 児童の学習状況については概ね良好であると言うことができる。

また，総合的な学習の指導は「好き」または「まあまあ好き」と答えた教師を『肯定的な群』と『否定的な群』とに分けて質的分析を行った結果，以下４点が明らかになった。

① 肯定的な群においては，総合的な学習を楽しく指導しており，教師自身が「楽しい」という意識をもつことがうまくいく大きな要因である。

② 否定的な群においては授業の進め方や指導方法が分からない，教材研究が不足している，時間が足りないことが挙げられる。これらのことが教師の負担感を増大させている。

③ 肯定的な群のカテゴリーには児童のことが複数見出されるが，否定的な群においては児童のことが１つのみであり，肯定的な群の教師は児童の様子により着目している。

④ 両群に共通なものとして「教師の裁量」を導出できた。総合的な学習は教師の自由裁量によるところが大きいゆえに，うまくいく要因にもなり，うまくいかない要因にもなる。

次に，質問紙調査に回答を得た教師の内，各年代（20代，30代，40代，50代）の教師12人を対象に聞き取り調査を行い，総合的な学習を計画，実施，評価するときの要点として，４つの示唆を導出することができた。

① 計画の段階から学習テーマに対する児童の興味を先読みし，どのように意欲を持続させていくかを検討することにより，主体的な活動につながるとの意識を持つ。

② 計画するときには，児童の興味をゆさぶって課題を発見させ，自分で追究しようとする意識と見通しを持たせて自力解決させる。

③ ゲストティーチャーの計画，調査・体験活動の準備，学習活動の素材や場所，道具の準備を行う必要があるが，教師の負担を軽減するためには，教師がお互いに実践記録を残したり学習成果物などを保存したりして，その引継ぎを行っていくという意識が重要である。

④ 記録・作品・成果物，またはそれらをファイリングしたポートフォリオファイルをもとにした教師評価，児童による自己評価や相互評価，観察による評価を行っている。

さらに，総合的な学習について否定的な回答をしている教師の意識をもとに，解決方法の提案を次の４点から行った。

① 学習の計画

「単元計画を立てるのが難しい」「見通しを持つことができない」については，毎年度，当該学年の担任によって新たな計画を立てるのではなく，基本的な単元計画を学校で作成し，学校カリキュラムとすることによって負担軽減になる。学校カリキュラムがあることにより，担任は担当学級の児童の実態に合わせて修正し進めていくことで改善が可能となる。校内で金沢市の方針や地域の実態に応じた計画を検討し，学校カリキュラムに反映させる意識をお互いに持つことが負担軽減につながる。

② 学習の進め方

学習の記録や成果物を保存し，次年度に引き継いでおくことによって，「教材研究を十分にできない」「指導方法がわからない」「授業の進め方が難しい」の問題に対応できる。記録や成果物を見ることでゴールまでの見通しを持って授業を進めることが容易となる。実践記録などをもとに当該の単元をどのように学習すればよいかが分かるような資料（スケジュールや素材の活用法など）も残すようにする。成果物は教師自身が理解できるだけでなく児童にも分かるモデルとなりうる。視覚的にわかるだけでなく，どのように学習すればよいかがわかるような計画表や資料なども残していくというシステムを各学校で構築されていくようにする。

③　教師の資質能力

「準備や指導に時間がかかる」「自由度が高くてやりにくい」についても単元計画や成果物等の保存での対応が可能となる。また，学校外の活動や施設への訪問，ゲストティーチャーの招聘などは活用計画に連絡先や施設情報なども記載しておくことで準備の時間等は軽減される。児童にどのような力が付いたか，身に付いた力が活用できているか等，児童にも自覚させることも重要なことである。そのためには活動のねらいに応じた適切な評価計画について検討したり，校内で各教師が蓄積・共有・活用したりしていくようなシステムも構築されるとよい。

④　教師の負担について

総合的な学習では地域素材をもとにした教材研究に負担感を伴う場合があるが，教科の学習にはそのような教材研究の必要性がないと言える。よって，教科の指導を得意としている教師や苦手としていない教師は，教科で身に付けた力を総合的な学習で生かすことを考え，指導が得意な教科と総合的な学習を関連させるプランを立てる。または，総合的な学習で身に付けた力を得意な教科で生かすプランを立てる。教科の学習と総合的な学習を横断したプランの作成ができれば，負担は減少する。さらに，教科では身に付けることができない力を総合的な学習で身に付けていくといった指導観を持つことによっても負担が減る。

最後に，聞き取りから得られた教師の意識を反映させた『素材とねらいの連関モデル』を考案した（図 1）。これは本論文における成果の 1 つである。

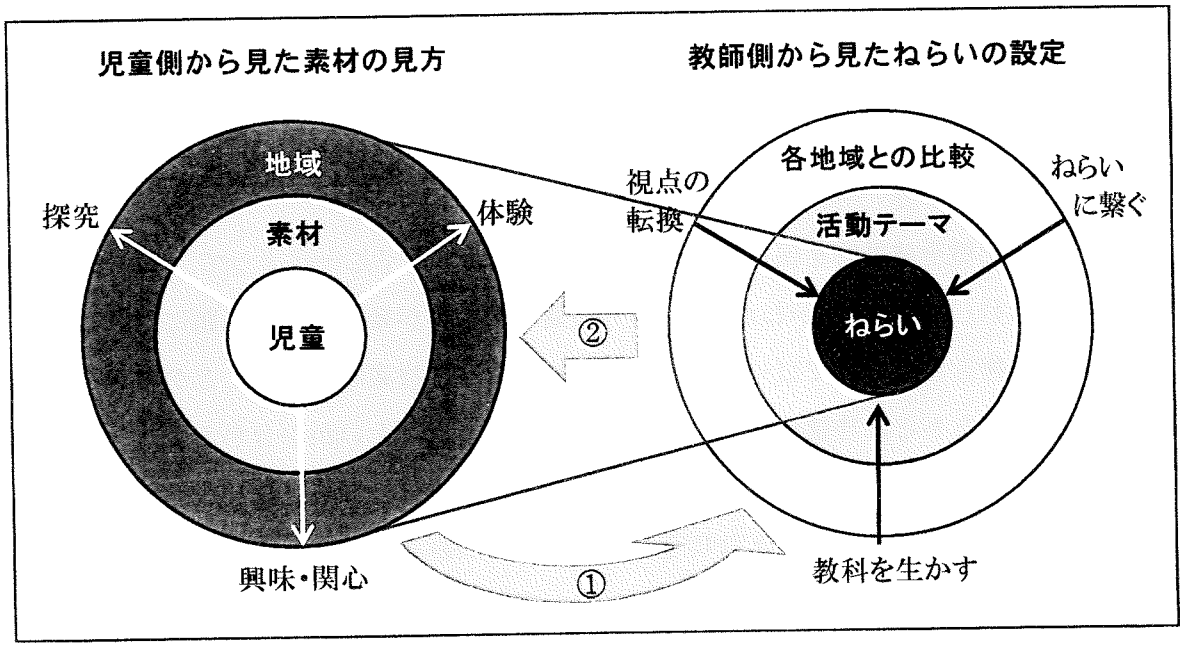

図 1　素材とねらいの連関モデル

また，このモデルと繋ぐ『総合的な学習の計画・実施・評価のための見取図』を組み立てることができた（図２）。これも本論文における成果の１つである。

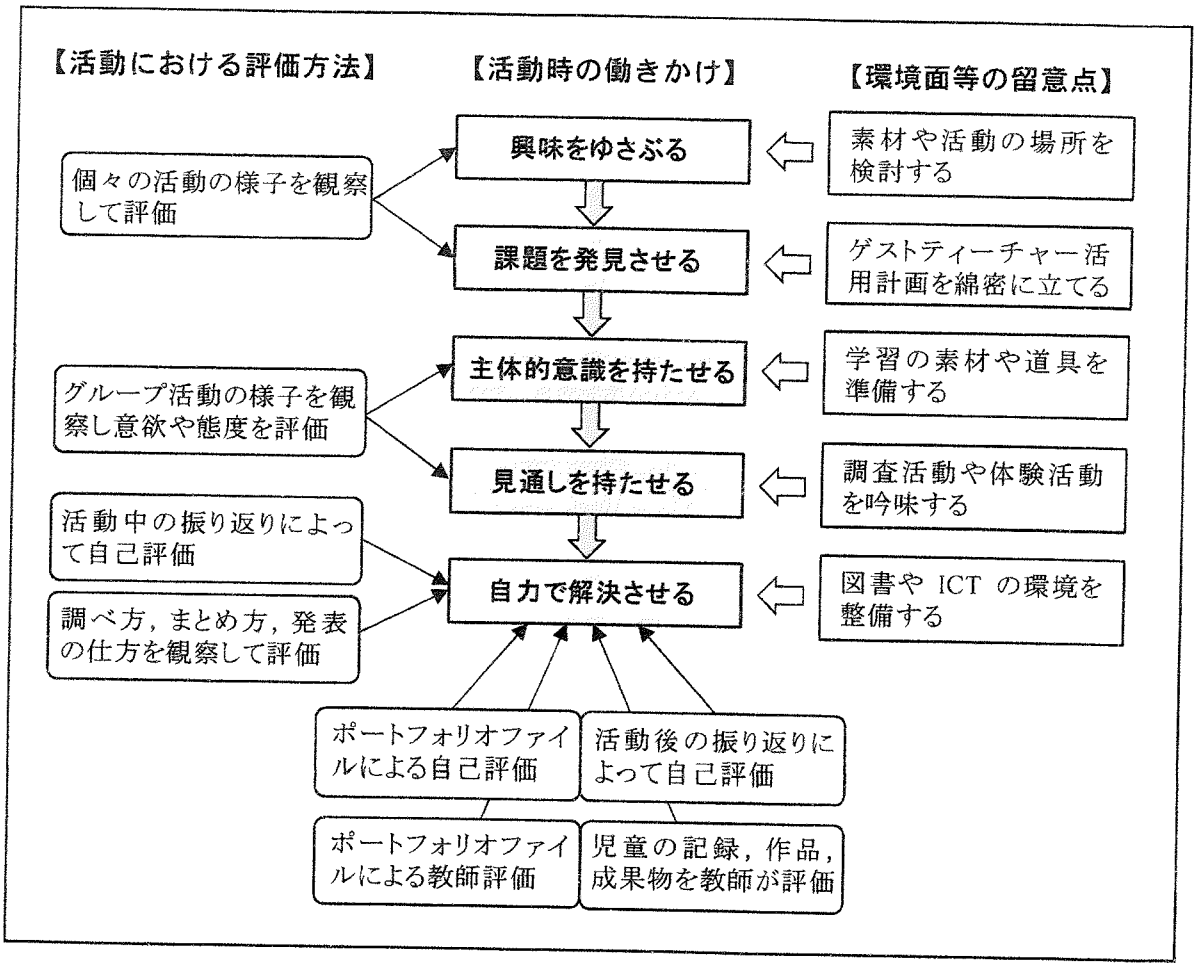

図２　総合的な学習の計画・実施・評価のための見取図

このモデルと見取図は，教師個々に学習指導計画や学習指導案を立てるときのみならず，各学校の教師集団で総合的な学習の本質や大事にすべきことを確認したり共有したりするために役立つことが示唆された。これは，学校全体でよりよい総合的な学習を展開していく上で，モデルと見取図が有用であることを意味している。

４　今後の課題

金沢市全域の小学校において総合的な学習の展開がよりよくなるため，さらには，石川県全域の小学校において総合的な学習の展開がよりよくなることを目指し，学校現場の教師たちとともに『総合的な学習の計画・実施・評価のための見取図』をもとに学習計画用の共通書式（マトリクス表）について考え，実用化を図っていきたい。

（本文 3773 字）